

氏 名 あら かわ しん た ろ う  
荒 川 慎 太 郎  
学 位 の 種 類 博 士 (文 学)  
学 位 記 番 号 文 博 第 218 号  
学 位 授 与 の 日 付 平 成 14 年 3 月 25 日  
学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当  
研 究 科 ・ 専 攻 文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻  
学 位 論 文 題 目 西 夏 文 『金 剛 經』 の 研 究  
——言語学的研究・校訂テキスト・訳注——

論文調査委員 (主 査)  
教 授 庄 垣 内 正 弘 教 授 田 窪 行 則 教 授 吉 田 和 彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

西夏語は11世紀初頭から13世紀初めまで中国西北部に存在した西夏国の言語である。現在では死語と化した。が、仏典を初め豊富な資料を残している。言語系統としてはチベット・ビルマ語派に属し、同語派の古い言語特徴を見いだせる言語としても知られる。

西夏語の研究は1960年代からめざましい発展を見せたが、未解決の問題も多い。加えて、これまでテキストとして利用できる状態で公刊された文献も決して多いとはいえない。本論文ではこの空隙を埋める意味で、これまで研究が遅れていた西夏文『金剛般若波羅蜜多經典』(以下『金剛經』)のテキストを、訳注を付して示すとともに、そこに記された西夏語の言語的な特徴を論じることを目的とする。

本論文は「第Ⅰ部 研究編」と「第Ⅱ部 テキスト編」から成り立つ。

研究編では、はじめに「第一章 西夏文『金剛經』解題」において、本考察で扱う資料の書誌情報・内容を検討した。

1. 1「西夏における『金剛經』の流行と西夏仏教における役割」では従来の目録による『金剛經』の整理状況をまとめた。また、西夏仏教における『金剛經』の重要性を示す資料を西夏法典にもとめ、当該の部分を紹介した。

従来『金剛經』と分類されてきた仏教文献には内容比定に正確さを欠く部分があった。1. 2「西夏文『金剛經』諸本と漢文『金剛經』との関係」では、これまで『金剛經』とされた文献の内容比定を再検討した。実際には、そのうち何点かが『金剛經』から派生した漢文『梁朝傳大士頌金剛經』、漢文『金剛般若經疏論纂要』、漢文『金剛經纂』の西夏語訳であることを明らかにした。漢文『金剛經纂』に対応する西夏文については、やや詳しく漢文との異同、書誌情報を付した。また、「分類に再考を要する仏教文献」として、『聖金剛王断能勝慧彼岸到大經典義顕燈炬記』の經典題名を確認し、これを『金剛經』関連の仏典として扱わない経緯を述べた。

1. 3「『金剛經』諸版の体裁と版形の概寸」、1. 4「ロシア所蔵『金剛經』の諸本の概観」の二節では、『金剛經』諸版について個々の資料の書誌情報を検証し、再分類をおこなった。従来の目録に記載される情報に明らかな誤りがあれば、それを訂正した。また、内容上『金剛經』のどの部分が残存するかを示した。この検証の結果、従来の目録による刊本の分類には再考の余地があることが判明した。最も版の多い『金剛經』刊本・折本を筆者は16種類に再分類した。

『金剛經』各版は章句に細かな異同が見られる。1. 5「『金剛經』諸本の成立年代と各本の関係」では、まとまった分量を有する『金剛經』断片について、これらの異同を整理し、系統を論じた。対象とした10種の版について筆者はおおよそ7つの系統にまとめた。

『金剛經』奥付によって、若干であるが西夏訳『金剛經』に関わった西夏人名が確認できる。1. 6「西夏訳『金剛經』に関わった西夏人」では、「校訂者」「発願者」「版刻者」それぞれについて、姓・名について論じた。

『金剛經頌』には非常に単純な誤字・誤刻が見られる。1. 7「『金剛經』と『金剛經頌』の関係—訳出の相違点」では、その例をあげ、『金剛經』と訳出の相違する点などを述べた。

『金剛經』は決して大部の經典ではないが、完本を有し、多数の版をもつことから、仏教文献学上軽視できない資料である。西夏語仏教文献としては極めて版が多いということは、西夏人の仏教信仰においてこの經典が果たした役割がいかに大きいかを物語る。文献学的には十分検討できなかった部分も多いが、内容比定と各種版の整理を行い得た。

研究編「第二章 『金剛經』における西夏語の諸特徴」は、『金剛經』とそれに関連する文献の言語について、西夏語学上の問題を論じた部分であり、内容上、2. 1「音韻編」と2. 2「文法編」に分けられる。

2. 1. 1「西夏語音韻学資料概説—他言語対音資料と西夏語資料—」では、西夏語再構音の手がかりである西夏語音韻資料について概説した。この資料は音韻編の議論の前提となるものであり、他言語対音資料と西夏語資料に大別される。

他言語資料とは、漢語・チベット語・サンスクリットと西夏語の対音資料を指す。その実際は『金剛經』中に例示できるので、この概説部分では、『番漢合時掌中珠』という西夏語—漢語対訳資料とその音注部分の構成について述べた。

西夏語資料は、西夏語音韻学書と西夏語脚韻詩とに分けられる。西夏語音韻学書とは、それぞれ異なる構成法からなる韻書・韻図である。『文海』、『雑類』、『同音』という主要な西夏語韻書について、その構成法を述べ、互いの関係について筆者の見解を述べた。また、西夏語脚韻詩はこれまで十分な論考の存在しなかった研究分野であるが、その特徴と西夏語音研究に果たす役割について述べた。

2. 1. 2「『金剛經』の諸資料から判明する西夏語の音韻」では、『金剛經』における他言語対音、すなわち漢語・チベット語・サンスクリットとの対応から西夏語の推定音を検証した。

『金剛經』文中には、漢語を音借用した資料、漢語対音資料が確認できる。この漢語対音について、漢語の声母・韻母ごとに西夏語音節で如何に転写されるのかをまず検討した。それにもとづき、西夏語の声母・韻母の推定音を検証した。

チベット語対音資料とは、西夏文字の横にチベット文字でその発音を記したものである。まずテキストと転写例の全文を掲載した。つづいて個々の西夏語声母・韻母を検証した。

サンスクリット対音資料とは、仏典中の陀羅尼を指す。これはサンスクリット音を意識せず音写した「呪文」であり、推定音にとって強い根拠となるものである。はじめに全ての転写例をあげ、西夏語音によるサンスクリット音転写規則を明らかにした。つづいて個々の西夏語音を検討した。

音韻編は資料的な制約から、西夏語の韻母については全てを検証することは不可能であったが、声母に関してはかなりの音素を検証できた。これらの考察結果は、ほぼ従来の推定音を裏付けるものであったが、一部の韻母についてはその鼻音韻尾の推定を再考すべき点が見られた。

文法編は、2. 2. 0「西夏語文法の概略」において西夏語文法の概略を述べたのち、主に格標識、動詞句、否定表現の観点から『金剛經』にみられる西夏語の文法の特徴を論じた。

2. 2. 1「西夏語文法研究における『金剛經』の価値」では、先行研究で指摘された、西夏語文法研究における『金剛經』の重要性を示すとともに、その具体例を再掲した。

2. 2. 2「『金剛經』に見られる西夏語の文法的諸特徴」は文法編の中心となる部分である。本節では『金剛經』に見られる西夏語文法の特徴を論じた。『金剛經』に特徴的な文法事項としては、「格標識の頻繁な使用」「動詞接頭辞、特に接頭辞1の使用」「否定辞の多用」が挙げられる。それぞれ、『金剛經』に見られる例文にグロス・訳を付けたものを資料とし検討した。

「格標識」については従来の分類を若干改め、格標識・名詞後置詞と分類した後、個々の形態素ごとにその機能と用法を論じた。

「動詞句」に関しては、西夏語学上議論の中心となる、動詞接頭辞の機能をまず検証し、助動詞・助詞とされる個々の形態素の用法を見た。「否定表現」は『金剛經』では極めて多くの用例が収集できるため、「動詞句」とは別の節をたててこれを考察した。

「動詞接頭辞」については、『金剛經』では他の文献に見られる「方向指示機能」が確認できず、用法としては「完了態表示」とみなすべきであることを述べた。

「否定辞」はその用法・機能について動詞接頭辞形の否定辞、助詞形の否定辞ごとに論じた。また、他の資料ではあまり例の見られない「二重否定構文」について、例を挙げて言及した。

研究編・テキスト編での筆者の西夏語推定音表記と西夏語韻書の呼称・分類との対応を明らかにするため、「付録1」として西夏語音表記法を付した。また、各語彙の出現箇所・頻度が明瞭になるよう、「付録2」に『金剛經』西夏語語彙集』を挙げた。

テキスト編では、西夏文『金剛般若波羅蜜多經典』、『金剛般若波羅蜜多經典頌』、『金剛般若波羅蜜多經典疏』、『金剛經典集』それぞれについて、西夏文テキスト、推定音、日本語訳と注を挙げた。本テキスト編での訳出・注釈は煩瑣をいとわず、細かな異同から、西夏語音韻論・文法論上特筆すべき点まで挙げた。一部の西夏文字については、その成り立ちを示す注を付けた。

巻末に最も完備している版の西夏文『金剛般若波羅蜜多經典』、『金剛般若波羅蜜多經典頌』、『金剛經典集』の影印を掲載した。

## 論文審査の結果の要旨

西夏語および西夏語文献の研究は1960年代にはいって急速に進歩し、その後順調な発展を遂げてきたが、なお膨大な量の文献がロシア・サンクトペテルブルグに保管されている。論者は2か年にわたってサンクトペテルブルグに滞在し、これら文献の綿密な調査を行った。その調査結果に基づいて本論文はまとめられた。

西夏語文献中、『金剛般若波羅蜜多經』（以下『金剛經』）とそれに関連する仏典は完本、断片併せて多数の版をもつことで知られている。しかしこれらが互いにどのような関係にあり、どのような性格をもっているのが、さらに言語が如何なる特徴をもつのかについて詳しく議論されたことはない。論者はこれらについて詳細かつ総合的な記述を提出した。

本論文は「第1部 研究編」と「第2部 テキスト編」の2編に大別される。

第1部研究編では、先ず第1章「西夏文『金剛經』解題」において『金剛經』とそれに関連する仏典の書誌情報について論じた。これまで『金剛經』として整理・分類されていた文献中には『金剛般若波羅蜜多經』以外に、漢語仏典『梁朝傅大士頌金剛經』、『金剛般若經疏論纂要』、『金剛經纂』からの西夏語訳の含まれることを明らかにし、従来の目録を修正した。さらにそれら西夏語仏典の翻訳原典である漢文との内容の相違などについても言及した。

次いで論者は、『金剛經』刊本・蝴蝶装本を2種、刊本・折本を16種に分類し、さらにその内のまとまった分量を有する10種の断片について内容を詳しく整理して7つの系統にまとめあげた。奥書をもつものからは『金剛經』の西夏語訳の校訂者、さらに発願者や版刻者の姓名などを明確にし、その素性などについても論じた。

研究編第2章「『金剛經』における西夏語の諸特徴」では、『金剛經』および関連仏典にみられる言語の特徴を「音韻編」と「文法編」とにわけて論じている。

「音韻編」では先ず西夏語再構音の手がかりとなる西夏語音韻資料について一般的な概説を試みる。論者の研究による新しい知見も提出されている。とくによく知られた西夏語韻書『文海』、『雜類』、『同音』の各構成法について詳しく検討し、お互いの関係を明確にした点は優れており、今後の西夏語音韻研究に役立つ内容といえる。また西夏語脚韻詩の構造特徴についても記述し、それが西夏語音韻の研究に果たす役割について論じたところも評価できる。

次に『金剛經』中の西夏語音韻について、西夏文字による他言語の音写形式や他言語文字による西夏語音写形式を資料として論じた。

先ず『金剛經』中の西夏文字音写された漢語音の分析を通して、逆に西夏語音の推定形式を検討し、これまで提示されていた推定音との関連について論じた。また西夏語音写された漢語音が、すでに中世漢語音に近い音体系をもつことも明らかにした。

続いて『金剛經』中の西夏文字の傍らにチベット文字で音注したものや、サンスクリット音を西夏文字で音写した陀羅尼を用いて西夏語の推定音を検討した。

『金剛經』中の他言語音あるいは他言語文字を用いた西夏語推定音の検討からはこれまでに提示された推定音を大きく改訂するほどの結果はえられなかった。ただ従来の推定音を再評価した点と、鼻韻韻尾に関しては従来の推定音を再検討する必要のあることを明確にした点とは評価できる。さらに西夏文字によるサンスクリット音転写に一定の規則性を見出した点も重要である。

「文法編」では先ず西夏語文法の概略を述べ、続いて『金剛經』に見られる西夏語文法の特徴について論じた。『金剛經』の文法特徴においては、とくに格標識、動詞句、否定表現について詳しく述べた。『金剛經』には格標識が多用されるが、その分析から、従来格標識とされてきた形式の一部が実は格標識ではなく名詞後置詞として分類されるべき性格のものであるという論者の主張は納得できるものである。

また西夏語学においてとくに重要な位置を占める動詞句に関しては、助動詞・助詞の形態素の機能を観察した後、動詞接頭辞についてとくに詳しく考察した。そして、他の文献には一般的である動詞接頭辞の方向指示機能が『金剛經』には観察されず、その機能が完了態表示に限られることを明確にした。

否定表現においては、否定辞の機能を動詞接頭辞形の否定辞と助詞形の否定辞の2種に分けて観察した後、『金剛經』に特徴的な二重否定構文に関して詳述した。

西夏語の文法研究は音韻研究に比べるとあまり進んでいない。論者の提出した文法に関する記述もそう多くはないが西夏語文法研究に貢献するところは大きい。

第Ⅱ部テキスト編では、西夏文『金剛般若波羅蜜多經典』、『金剛般若波羅蜜多經典頌』、『金剛般若波羅蜜多經典疏』、『金剛經典集』のそれぞれについて、西夏文テキスト、推定音、日本語訳、さらに注記をほどこし、付録として全テキストの語彙を掲げた。難解な内容を遺漏無く訳出した論者の努力は高く評価できる。また字句の異同や、西夏語の音韻、文法に関する注記もよく書けている。

これまで西夏学においてとくに重要な文献と云われてきた西夏文『金剛經』の研究を、書誌、文献学、言語学の面から総合的に考察した本研究の内容が今後の西夏学に及ぼす影響は小さくない。とくに論者のテキストが今後西夏語あるいは西夏仏教の研究に広く利用されることは間違いない。しかし本論文に難点が無いかと云えばそうではない。本論において重要な位置を占める音韻に関する記述には客観性に欠けるところもみられるし、文法記述にも不十分な点はある。しかしこれらの難点によって本論の価値が大きく損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年2月6日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。